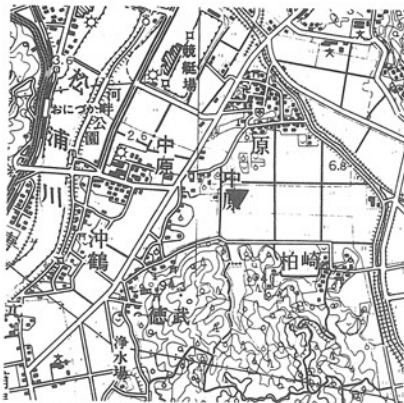


# 佐賀・中原遺跡 なかばる

- 1 所在地 佐賀県唐津市原字西丸田
- 2 調査期間 一九九九年(平11)七月～二〇〇〇年一月
- 3 発掘機関 佐賀県教育委員会・唐津市教育委員会
- 4 調査担当者 小松 譲・美浦雄二・辻村美代子
- 5 遺跡の種類 集落跡・水田跡
- 6 遺跡の年代 六世紀後半～九世紀前半
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(唐津・浜崎)

本遺跡は鏡山の南西部五・五kmの水田地帯にあたり、唐津湾と松浦川によって形成された古砂丘列上に立地する。従来の、一九六五年の日仏合同調査や一九八六年の唐津市教育委員会の調査によって、鉄戈、鉄矛を副葬した弥生時代中期の周甕棺墓や古墳時代中期の周溝墓などが確認されている。本調査は西九州自動車道建設に伴うものであり、弥生・古墳時代の墳墓を確認

した地点から東方約四〇〇mに位置する。これまで一区から四区の調査を実施し、奈良時代の集落と水田を検出した。主な遺構には、二区では掘立柱建物四棟・井戸一基・旧河道と水田、四区では掘立柱建物三棟がある。掘立柱建物の規模は二間×三間が主で、特別大型のものはみられない。柱の掘形は円形である。建物群の配置は、二区は雑然としているのに対して、四区の建物の主軸は正方位で水田畔の区画方向と一致する。

二区の集落と水田の間を流れる旧河道は、幅約一五m深さ約一・五mで、埋土は植物遺体層や黒褐色中砂層などからなる。埋土中から多量の須恵器・土師器・木製品が出土した。特筆される遺物として墨書土器や中空円面硯・転用硯、木製品には挽物椀・舟形木製品・槌の子などがある。墨書土器は約四〇点あり、須恵器を中心とする。主なものに「林」「川嶋」「魚女」などがある。出土遺物の時期は六世紀後半から九世紀前半である。

今回報告する木簡二点も、旧河道から出土したものである。

## 8 木簡の釈文・内容

(1) 「大村戸主川部組次」〔付カ〕〔部カ〕 (191)×38×9 019

(2) 〔 〕 (222)×27×4 019

(1)は下半部を欠損する。上端木口面は両面から削られ、やや丸味

をもって仕上げられる。表面および側面は平滑で、表面上部二カ所にわずかながら削り痕がみられる。

大村に関しては、肥前国には大村駅が存在が知られる（『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条）。その所在地は、松浦郡内に想定する説と、『和名類聚抄』にみえる彼杵郡大村郷に比定する説とがあるが、今回松浦郡内にあたる当遺跡から「大村」と記した木簡が出土したことは興味深い。川部氏は、『続日本紀』宝龜六年四月壬申条に肥前国松浦郡人の柁師として登場する川部酒麻呂の一族とも考えられる。また日下部は、『肥前国風土記』松浦郡の項に日下部君の祖先伝承が見える。

(2)は、上端は右側から中央まで二次的に刃物を入れており、そこで折れて欠損する。表面上部に墨痕があるものの文字は判読できない。下端の右側面は削りによりやや細くなる。両面にタテ方向の削り痕が認められる。

本木簡の釈読にあたっては、京都橘女子大学の狩野久氏・奈良国立文化財研究所の館野和己氏・群馬県教育委員会の高島英之氏に教示いただいた。

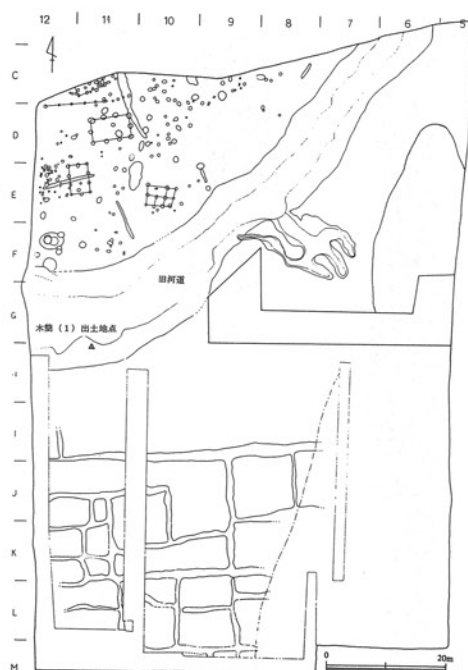
（小松 譲）



(2)

(1) (赤外線画像)

(1)



中原遺跡2区